

炭素14年代法による 茨城県牛久市観音寺の年代

Radiocarbon Dating of Kannon-ji Temple, Ushiku-shi, Ibaraki

坂本 稔・今村峯雄・一色史彦・若狭 幸・松

SAKAMOTO Minoru, IMAMURA Mineo, ISSHIKI Fumihiko,
WAKASA Sachi and MATSUZAKI Hiroyuki

- ①はじめに
- ②資料調査および試料採取
- ③試料と処理
- ④結果と考察
- ⑤観音寺本堂の建立年代
- ⑥おわりに

[論文要旨]

茨城県牛久市に所在する観音寺（茨城県牛久市久野町 2976）は、嘉禄2年（1226）、十一面観音を祀る堂として建立されたと寺伝にあり、その後大永5年（1525）に再興され、現在の本堂は宝永4年（1707）の再建によるものと考えられている。本研究では、観音寺本堂および仁王門の保存修復工事等に伴う旧部材等の保管資料の炭素14年代測定を行った結果について、棟札などの文字資料から推察されてきた建立あるいは修復時期などとの関連を比較検討した。

仁王門の保存修復工事で得られた本堂側廻りの旧柱材（ケヤキ）2本の最外層の年代は炭素14-ウィグルマッチ法（¹⁴C-wiggle-matching）によりいずれも13世紀後半か、14世紀初頭に伐採された材と見られた。建立期の嘉禄2年（1226）より新しいが、再興されたとする大永5年（1525）よりはかなり古い年代となっており、「宋風彫刻」とされる十一面観音の鎌倉後期～室町期の年代と整合している。観音寺本堂の細部様式による建築時期の年代認識（鎌倉期）とも矛盾しない。また十一面観音の寄木構造の固定保持のため用いられていた竹釘（昭和の本堂保存修復時に得られ保管）、同じく観音像の着衣部分の塗装面の布（麻）の年代は、寛永7年（1630）の十一面観音修理の時期に符合する結果となった。

【キーワード】炭素14年代法、古社寺建築、挙鼻、鎌倉時代、ケヤキ